



▲第2回かいゆき展



▲ふれあいアート展ふるさとスケッチin臼杵

ん吉とネコのにゃん吉の作品を中心に、色鮮やかな作品が並びました。

街に飛び出せ!! 公開講座&作品展

10月26日に臼杵市内で開催した美術科主催の公開講座「一般参加者と美術科学生による『ふるさとスケッチin臼杵』でのスケッチ作品を展示した「ふれあいアート展ふるさとスケッチin臼杵」を12月11日から20日まで、TOSハウジングメッセ展示場で開催しました。3時間という短い時間でしたが、参加した市民と本学専攻科造形専攻美術コースの学生は、臼杵の古い町並みを思い思いの視点と表現で作品に仕上げていました。

また、12月22日から27日までは、専攻科造形専攻1年で染色による作品制作を行っているかいゆきさんが個展「第2回かいゆき展」をアートプラザ・ギャラリーB(大分市)で開催しました。うさぎのぴよ

TOS「ハロー大分」に マリンバで生出演

毎週土曜日、午前9時55分から放送されているTOSテレビ大分の情報番組「ハロー大分」に12月5日、打楽器コースの学生4人がスタジオで生出演し、『魔女の宅急便』の「海のみえる街」をマリンバで演奏しました。前日から楽器を搬入・リハーサルを行い、当日は芸短大から10名ほどの見学者もいるなかでの本番でした。出演した学生にとっても初めての体験で、かなり緊張したようでしたが、TOS側も初めて間近に見るマリンバに、リハーサル時から質問が飛び交い、おおいに盛り上がりました。本番ではスタジオが豊かなマリンバの響きに包まれ、アナウンサーや番組スタッフ、見学者も心地よいひとときを過ごしました。放送終わり頃には「演奏に癒されました」と視聴者の方からのFAXも紹介され、出演者ともども喜びを分かち合いました。



▲TOSスタジオで司会の方々と一緒に



特別講義 「日本の伝統芸能」

～歌舞伎と供に育った長唄・三味線の魅力～開催



▲熱演する「さくら会」のみなさん

11月11日、「さくら会(代表・杵屋六絹也)」のみなさんをお迎えして、特別講義「長唄・三味線の魅力」を開催しました。長唄や三味線の実演により、学生たちは、日頃耳にする機会の少ない日本の伝統音楽の世界に触れると共に、講義後半部では三味線演奏の指導もあり、学生たちは果敢に挑戦していました。

【学生の感想】

以前ギターに挑戦したことがあり、楽器は少し苦手だったのですが、初めて触れる楽器で曲が弾けた時には感動しました。指導していただいた先生に感謝です。



▲三味線演奏に挑戦

春が楽しみ♡園芸サークル恒例 チューリップの球根植えました

(サービスラーニング認定)

吉岡孝准教授&園芸サークルは、12月の毎週土曜日、キャンパス各所にチューリップの球根を植え込みました。基本の赤・白・黄色に加え、ピンク&白などの2色を含む総数2,000個の球根が、春の到来を待ちわびています。

なお、開花は3月25日以降の予定です。お楽しみに。

●写真は2009年4月のものです



学長コラム

中山 欽吾

<テーマ>

明けましておめでとうございます



似顔絵/石丸 裕美

世界規模での景気落ち込みが私たちの生活を直撃して、厳しい逆風に向かっているような新年ですが、今年が少しでも暮らしやすく明るい年になるよう、強く前向きの希望を持つことが大切だと思います。

さて、昨年は「小さくてもキラキラ輝く芸短大」のキャッチフレーズで活発な活動をしてきました。全学挙げて実に様々なコンサート、公開講座などのイベントが行われ、たくさんの方々が活躍してくれました。芸短フェスタも35事業と一昨年よりさらに充実しましたし、参加して下さった県民の皆さんからも「芸短は変わってきたね」と温かいお言葉をいただくようになりました。

とはいえ、私たちのやっている中身がこの一年でガラッと変わったわけではなく、どうすればキラキラ輝く芸短大になれるのか、みんなで考え行動してきたことが実を結んできたのだと思います。積極的な広報活動を行う体制を整えたことで、マスコミに多く取り上げられる様になり、より多くの県民に皆さんの活躍する姿が見えてきました。今まで努力してきたことが、はっきりと輝きとなって発信できはじめたのです。

相互交流協力をみても、この1年で結んだ協定は6か所となり、過去の合計数と同じになりました。教育機関では中国・武漢市の江漢大学(2月)、ニュージーランドのクライストチャーチ工科大学(12月)、芸術文化関係では大分県文化スポーツ振興財団(3月)、メディア関係では毎日新聞大分支部との寄付講座開設を含む協定(7月)、別府ビーコンプラザ共同事業体(8月)、TOSテレビ大分(10月)。自治体では一昨年11月に竹田市と結び、大分市、由布市に続く3つ目の協力体制が発足し、廃校となっていた下竹田小学校跡をサテライトキャンパスとしてアートキャンプを始めたこと(9月)も挙げられます。芸短大を塙で囲まれた敷地に閉じこめるだけでなく、ヴァーチャル(仮想)キャンパスとして県民の中に積極的に出ていくことが、座学では決して得られない貴重な経験となり、同時にそれが発信にもなるというわけです。

私たちの活動を後押ししてくれるように、「体験をスキルに変えるナラティブ能力育成事業」が21年度『大学教育推進プログラム』(文科省)に選定され、全学生を対象とした「人間力育成」への取り組みが始まりました。逆風にめげずに前進あるのみです。

<連載>

芸術と文化の都市めぐり

第2回 ピアチェンツァ、ブッセート、ヴェローナ(イタリア)

イタリアの五大都市といえば、ミラノ・ヴェネツィア・フィレンツェ・ローマ・ナポリだが、今回はあえて私にとって想い出深い3つの街を取りあげよう。

ピアチェンツァ・・・私の留学したコンセルヴァトリーオ(国立音楽院)があり、ミラノからボローニャ方向に70キロほど南東へ下りたところに位置し人口は10万人ほど、小さいながらも趣のある街である。ピアチェンツァ市立歌劇場は、街の中心ドウオーモ(大聖堂)の南側にあり、この街の耳の肥えたオペラファンを魅了し続けている。初めてこの舞台上で演奏した時のうちふるえるほどの感動は、今でも昨日のこのように思い出される。

ブッセート・・・ピアチェンツァとパルマの中間に位置しヴェルディが中学時代を過ごしたこの街は、彼に関する資料館やヴェルディ劇場などがある。郊外ロンコレにあるヴェルディの生家を訪れた時、あまりに偉大なヴェルディが過ごした空間を肌で感じ、少しだけヴェルディに近寄れた気がした。

ヴェローナ・・・街のあちらこちらが「ロミオとジュリエット」

を彷彿とさせる。この地のシンボルアリーナ(円形野外劇場)は、約2万人を収容するという途方もない大きさ。ここで行われる夏の野外オペラ祭は圧巻である。夜9時過ぎに開演したヴェルディ作曲「アイダ」が終演したのは日付が変わった午前1時。興奮冷めやらぬ中、夜行列車に乗り帰途についたのも懐かしい思い出。私の第二の故郷イタリア、音楽薫る太陽の国イタリア、明るく愛情溢れる人々に囲まれこの地で学べたことは、私の財産である。(文・写真/音楽科 准教授 行天 祥晃)



▲偉大な作曲家ヴェルディの生家



▲円形野外劇場



▲埋め尽くす観衆



▲ピアチェンツァ市立劇場・舞台上から